

## 平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

大阪市立大学医学部附属病院 村井雅美

8 月 2 日から 9 日まで、スタンフォード大学(米国、カリフォルニア州)にて研修を受けさせていただいた。講義や施設見学など、内容が盛りだくさんで 1 週間では足りないほど有意義なものであった。

### 1. 参加した目的と達成度について

今回の研修へ参加した目的は、3D ラボセンターの運用及び、高磁場 MRI の有用性を知ること、そして最先端の技術を自分の目で見て、自己啓発を促すことであった。

当院でも 3D 画像の要求が増加したが、現状では一部の技師しか対応できず、多くの技師が対応できるようにしようとする教育が十分ではなかったり、作成者独自の考えが反映されることが案じられる。スタンフォード大学では 3D ラボセンターで専属の技師が 3~6 ヶ月のトレーニングを受け、どの技師が作成しても同じ質となるようにマニュアル化されていた。トレーニング方法、オーダーの分類等をもう少し知りたかった。また、高磁場 MRI に関する講義では、今後、臨床でも高磁場 MRI での多様な検査が一般化されていくと予想された。また、医療以外の分野でも活用されていることを知った。そして様々な講義や、日本との違いを目にし、ともに研修を受けたモチベーションの高い方々と触れあうことで大きな刺激を受け、今回参加した目的は達成されたと思う。

### 2. アメリカの放射線診療の利点と問題点について

時間当たりの検査件数や 3D 処理の件数などが日本に比べ少なく、余裕をもって患者対応や検査ができていたように感じた。その分装置の稼働時間は長く、人件費、労働条件等から日本では難しい勤務体制だと思った。また、専門認定や更新の制度が整っており、自分の分野に自信と責任をもって仕事をされていると感じた。完全に各モダリティが独立していて、1 つの疾患を様々なモダリティで追うことができないのは欠点であるように思った。

### 3. 今回の研修で得られた成果を今後どのように活かすか

勤務体制や内容を凝り固まった見方で考えず、働きやすい環境を整える参考にしたいと思う。今回得られた広い視野で物事を見て、現状を把握することで向かうべき方向や、改善すべきことに気づけるのではないと思う。また、今の思いを保ち、自分の仕事に自信と責任を持って行えるように、そして自分の専門といえる分野を持ち、深めていけるようにしたいと思う。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった日本放射線技術学会関係者の皆様、ならびにスタンフォード大学の皆様に深く感謝致します。また、お世話して下さった GE ヘルスケアの皆様、引率して下さった広島大学の木口氏に深く感謝いたします。ありがとうございました。

Stanford Medicine Imaging Center にて。

患者さんにもスタッフにも居心地のよい空間を追求されている。

ここで働きたいと思える素敵な施設だった。

